千葉聾学校幼稚部について

県立千葉聾学校教諭　手塚（てづか）　清（きよし）

1　はじめに

本校の幼稚部では、難聴児への早期教育を行っている。

聴覚障害の発見は以前、我が子の言葉の遅れや音への反応の鈍さに不安を感じる保護者が、耳鼻科を受診して発見されるケースが多かった。医療が発展した昨今では、新生児聴覚スクリーニング検査によって、生後数日で難聴が発見されることが多くなっている。誕生まもなく難聴を宣告される保護者への早期支援、生後数か月で補聴器装用が始まる乳幼児への早期支援は、以前にも増して重要となっている。

2　幼稚部の取組

⑴コミュニケーション意欲を育てる

難聴児の生活上の困難は、コミュニケーションがとりにくいということである。幼稚部では、「聞こえにくさはあるが、人とのコミュニケーションが大好きな幼児」を育てたいと考えている。そのため教師は、幼児の表出をできるだけ受容する。幼児の心情にできるだけ共感する。受容や共感を積み重ねることにより信頼関係が構築され、幼児は「先生に話したい、先生の話を聞きたい」と思うようになる。幼稚部における活動の基本として、幼児のコミュニケーション意欲を育てることに取り組んでいる。

⑵実体験から想像力を身に付ける

難聴児は耳から入る情報量が少なく、音情報をもとにして想像し思考する擬似的な体験が、健聴児と比べると圧倒的に少ないのではないかと感じる。難聴児が「想像を膨らませる」「様々な出来事の概念を形成する」ためには実体験が欠かせない。幼稚部では、学校行事や校外学習だけではなく、普段の何気ない出来事（季節の変化、病気や怪我など）も話題にし、幼児の印象に残るよう丁寧に取り上げている。そして、知識や想像力が膨らむように取り組んでいる。

⑶日本語力を伸ばす

難聴児の重要な課題の一つは、日本語力の向上である。日本語力は、単語帳で語彙を増やせば身に付くというものではない。まして幼児である。今、この子は何を伝えたいのか、どのような心情なのかと身近な大人が察知し、日本語に置き換えて本人に聞かせたり言わせたりしていく。そうすることで日本語力を伸ばすようにしている。そのため教師は、幼児と信頼関係を構築する。そして保護者には毎日付き添っていただき、共に学校生活を送るようにしている。親子で常に家庭生活と学校生活を共有することで、幼児の伝えたいことを的確に把握し、言語化して繰り返し聞かせるよう教師から保護者へアドバイスをしている。

3　おわりに

科学や医療の発展により、補聴器や補聴援助システムの向上、人工内耳の普及など、難聴児を取り巻く環境は大きく変化している。幼稚部では「難聴児にとって早期教育は非常に重要である」という使命をもち、言語指導や聴覚活用や発音などの聾教育、保護者支援、幼児発達や進路相談など、専門性を維持継承しながら日々の実践に取り組んでいる。